

三、國語及び朝鮮語の系統

一

國語及び朝鮮語が系統上如何なる語族に屬すべきものであるかに就いては、從來種々の説がある。即ち或る學者は此等を以てウラルアルタイ語族に屬するものとし、或る學者は所屬不明の言語又は全く別種の言語と見做して居る。之を以てウラルアルタイ語族に編入する學者中でも、或は之をツングース語中に屬せしめ、或はツングース語サモエード語、土耳其語、蒙古語等と對立せしむる等人々に、意見を異にして居る。而して此等言語のウラルアルタイ語族に屬すべ

きものなることを始めて唱道したのは、實にクラブロートで西紀一八二〇年其の後ポーラーの如きは、日本語を以てウラルアルタイ語族殊に北サモエード語に最も近似して居ると論じ、ガベレンツの如きも、日本語が滿洲語と共通の點あることを若干の例を擧げて説明して居る。

二

國語と朝鮮語との系統的關係

藤井貞幹

新井白石

次に國語と朝鮮語との關係に就いては如何といふに、これも多少古くから諸學者の注意を惹いた。我が國の學者としては、徳川時代の藤井貞幹の如きは、同系論者の先驅であらう。即ち彼は「衝口發」なる書を著はし、最初日鮮兩國人は通譯を介せずして談話を通じたものであらうから、元々同一の言語であつたらうと論じて居るが、當時未だ研究法の不完全であつたため、十分なる効果を收めることの出来なかつたのは、甚だ遺憾な次第である。其の他新井白石の如き「東雅」なる著書中に於て、日鮮兩語の大膽なる比較論を試みて居るが、(本書「國語朝鮮語の語彙」比較研究資料の條參照)それら單に單語の比較論に止まつて居るのは、些か物足らぬ氣持がする。然るに近くアストンの日鮮兩語に關する研究出づるに及び、兩語の比較論は一躍科學

アストン

的傾向を帶ぶるに至つた。即ち氏は西紀一八七九年「日鮮兩語比較研究」(A Comparative Study of the Japanese and Korean Language)なる書を著はし、音韻、語法等の各方面より兩者の比較を試み、兩語はもと大陸に於ける同一言語より分出したもので、其の原始語は早く消滅したが、一は半島に止まつて朝鮮語の祖となり、一は海を渡つて日本に入り、日本語の祖先となつたと論じて居る。アストンの比較研究は頗る卓見に富み、後世の學者を益すること極めて大なるものあつたが、兩語の同源論は其の後金澤文學博士によつて大成せられた形がある。此等の事は博士の著書「日本文法新論」[「國語の研究」及び「日韓兩國語同系論等を一讀すれば、其の概略を窺ひ知ることが出来る。此の他白鳥博士は歷史上より、宮崎中田兩博士は法制上より兩語の比較を試みられて居るが、之は多くは單語の上に止まつて居る。

三

ウラルアルタイ語族の特質は如何なるものであるかといふに、其の重なるものは母音調和、子音の法則、頭音及び末音規則、文の種類の構造法の五者と見ることが出来る。此等の点より國語及び朝鮮語が、此の語族に對して如何なる關係

に立つかを考へて見よう。

母音調和

(一) 母音調和 (Vocal Harmony) 協韻法ともいふ。即ち實辭の中に含まれて居る母韻が、其の次に來る虚辭中の母音を自己と同一又は類似の音に變化せしむる音現象をいふのである。例へばヤクトトルコ語に於て、a・o・u・i の諸母音を強母音、ä・ö・ü・i の諸母音を弱母音といふが、實辭中に強母音があれば、虚辭中の母音も強母音に變じ、實辭中に弱母音があれば、虚辭中の母音も弱母音となる。其の完全に同一母音に變する一例を示せば、*ogo(子)*、*asä(熊)*、*aga(父等)*の複數は *ogo-lor*、*asä-lär*、*aga-lär* となり、強母音の變化に従ふものには、*ogo-nü(子)*、*aga-ni(父を)* の如きあり、弱母音の變化に従ふものには *asä-ni* (熊をの如きものあり、強母音は強母音間に於て、弱母音は弱母音間に於て變化をなし、強弱の相混することが無いのである。

朝鮮語及び
國語の母音
調和

母音調和はウラル・アルタイ語族の一特質となつて居るが、其の中の或る言語には今日之を缺き、又或る言語には規則の亂れて居るものもある。國語に於ては之が十分なる根跡を發見し兼ねるけれども、古くより「渡」を「ワタリ」(Wataru) 又は

子晉の法則
連今子晉

(二) 子音の法則 重なる二三箇條を擧ぐれば、次の如くである。

國語に於ては連合子音を許さぬ。それで會々 Cutlet の如き語が入り來ると之を「カツレツ」[Ka tsuretsu] の如く、t と l との間に母音を挿んで發音する。朝鮮

濁音

國語の濁音

語に於ては「물건」物件、Mulgŏn 「업소」(無^sop-so)等の如く、連合子音が可能である。

(ロ) 元來は清音のみで、濁音は後世の發達にかゝる。今日でも濁音は清音の轉化によつて生じたもの位に軽く考へられて居るのである。

國語は本來清音のみで濁音を有せざりしや否や之は以前から學者によつて論ぜられた所で、頗る重大なる問題である。鈴木重胤が「詞の近^も」に

「古史徵に古語に濁音のせ^れなる由は、先づ今は誰も濁音と思ひ定めたる語に、もとは清音なる語多かり。其は始^{ハジメ}繼^{ツギ}水^{ミヅ}などのシ^シキツは古書にも多く

濁音のかなを書き、今も大かたの人は濁り云ふめれど、語の原をとへば、始^{ハジメ}は端^{ハジツギ}繼^{ツギ}は付^{ツキ}水^{ミヅ}は滿^{ミツ}と通ゆれば、原は共に清音にして、濁るは中々に後なり。

此一つ二つに限らず、長^{ナガ}は中、正^{ただ}しは立^{タチ}し、氏^{ウヂ}は内なる類、凡て濁音に云、萬の語の解がたきは、清音に返して考ふれば……明となるなり。」

といつて居る。彼の箇々の語に關する語原的解釋の如きは、餘り感服が出來ぬが、多くの語の中には、もと清音たりしものが、連聲の便により濁音に轉

じたものが無いでもあるまい。所謂連濁の如きは、其の最も著しい例である。唯此等の場合より類推して、あらゆる濁音は悉く清音に還元し得べきものと考へるのは、少しく早計に失した議論であると思はれるのである。吾人は濁音の一部は慥かに清音より轉成したものであることを是認するけれども、濁音の總てが以前に於て清音であつたといふ議論に對しては、絶対に賛成が出来ぬのである。

朝鮮語に於ては、國語に於ける場合よりも一層著しく濁音が二次的のものたることを示して居る。其の證據には從來濁音を表はすべき諺文は作られなかつた。勿論昔時漢字の濁音を表はすために、今日使用せられぬ或る一種の新諺文を制定したことはあつたが、それは朝鮮語其のものの濁音を表記するためのものでなく、自然に消滅してしまつた。世人はよく朝鮮語には濁音が無いといふことを口にする。併しながら實際に於ては濁音が明かに存在して居る。내가「私が」간다「行く」아버지「父」といふ場合の「가」「다」「아」「비」等が誰が清音に發音する人があらうか。何人も明かに ga, da をといふのである。即

ち朝鮮語には濁音が無いのではなくして、濁音を表はす文字が無いのである。朝鮮人自身すら此等の音を濁音と感じ得ぬのは、主として耳の練習の缺如せるに起因するのであるが、一方から見ると、濁音なるものが朝鮮語に於て如何に第二次的のものとして考へられて居るかの事實を暗黙の間に物語るものといはねばならぬ。

頭音規則

(三) 頭音規則 (Law of Initial Sound) 頭音は又語頭音ともいひ、語の最初に来る音を

いふのである。言語の種類によりては、或る音は頭音として存し得るもの、又存し得ざるものあり、又或る變化を加へて之を存せんとするものなど色々ある。此等頭音に關する規則を頭音規則といふのである。今ウラル・アルタイ語族の頭音規則として一般に認められて居る重なる箇條を列舉し、之に國語、朝鮮語の音現象を對比すれば次の如くである。

(イ) 語頭に濁音の來ることを嫌ふ ユーラッタサモエード語、芬蘭語にありては、

語頭に濁音(有聲音)の來ることを許さず、タウジ語は b dj を、エニセイーサモエード語は g d 以外の總ての濁音を許す。

國語に於ても純粹の和語としては語頭に濁音の來るものが頗る少ない。朝鮮語に於ても固有の語としては語頭に濁音の來ることが無い。

(ロ) 語頭に二箇以上の子音の固まりを嫌ふ。サモエード語、芬蘭語の如きこれである。それであるから連合子音を語頭とせる外國語が自國語内に入つて來るとこれに種々の變化を加へる。例へば (a) Strand なる語はスオミ語では Ranta、エストニア語では Rand、Glas なる語はスオミ語では Las、エストニア語では Lass なるが如く、初の部分の子音を脱落せしむるものあり、(b) Flora をマシアル語で Forint といふが如く、後の部分の子音を脱落せしむるものあり、(c) Sail をマシアル語で Itallo といふが如く、前方に母音を添加するものあり、(d) Prior を同語で pejel といふが如く、中間に母音を挿入するものもある。

國語に於ても語頭の連合子音を嫌ふ。それで葡萄牙語 Christo (基督)、Erase (瓶を「キリスト」〔Kirisuto〕「フラスコ」〔Furasuko〕和蘭語 Grofgrein (織物の名) Blik (葉) を吳紹福林 (〔ofukurin〕「ブリキ」〔Buriki]) など、中間に母音を挿入して發

音するものがある。朝鮮語に於ては、昔時は語頭にハ、ハ、ハの如き連合子音を許したやうであるけれども、今日に於ては廢滅に歸して居る。

(ハ) 語頭に、r、音の來ることを嫌ふ
アルタイ語族の言語では、語頭の r を以て
始まるものが無い。

國語に於ても、純粹の和語にして「ラ」行の頭音を有するものは無いといはれて居る。其の發音の困難であつたために「露西亞」(Russia)を「オロシヤ」(Orosiya)といふ如く、前に母音を附して發音した例もある。朝鮮語に於ても語頭の「ㄹ」の發音は困難で、라, 락, 러, 르, 로, 룩, 류, 르, 리, 르等は나, 야, 녀, 여, 노, 오, 누유, 니, 이, 등의如く發音される。「露西亞」を「俄羅斯」(아라사)といつて、母音を前に添へる現象などは、國語の場合と同一の理由を以て説明することが出来る。

(四) 末音規則 (Law of Final Sound) 末音とは語の最後に來る音の謂である。これにも頭音規則同様、言語によつて種々の制限がある。ウラル・アルタイ語族に於ける末音規則はさう複雑ではない。即ち其の重なるものを述べると、語の終りは原則として母音又は單子音より成り、時として連合子音の來ることを許すのである。滿

國語及び朝鮮語はウラル・アルタイ語族の一員であらう

洲語の如きは殊に母音を以て終ることを好む傾向がある。

國語に於ては末音は原則として母音であるが「あります」[Arimasu]の「ます」の如きは近來 mas・のやうに發音せられ、子音を以て結ぶ傾向を生じて居る。朝鮮語にありては、母音は勿論單子音も普通に末音となり得るのみならず、連合子音即ち ㅃ ㅆ ㅈ ㅊ ㅌ ㄷ ㄴ ㄹ ㅁ ㅇ 等の如きで語末を結ぶことも相應に澤山ある。

(五) 文の構造法 (一) 文の構造が添着的性質を帶ぶること、(二) 主語が最初に來り、客語が之に次ぎ、述語が最後に來ること、(三) 限定の語句は限定せらるべき語句の上に来ることなどはウラル・アルタイ語族の主たる性質である。其の他此の語族には冠詞 (Article) を有せざること、性 (Gender) 及び關係代名詞 (Relative Pronoun) を缺けることなども見遁すべからざる條件であると思ふ。而して國語及び朝鮮語は何れも此等の條件に叶つて居る。

以上五箇條に亘つて説明したウラル・アルタイ語族 (國語及び朝鮮語は姑く之を措き) 中の或る言語と國語及び朝鮮語との比較を一瞥する時は、或る点に於ては多少の相違は存するが、誰しも寧ろ類似点のより多きことに氣が附くであらう。即ち兩者の系統

的關係は之を否定せんとするものよりも、之を肯定せんとするものに對して、より有力なる材料を提供して居るのである。國語及び朝鮮語は今後尙ほ研究を要すべき点が多々あるであらうけれども、畢竟ウラル・アルタイ語族の一員でなければならぬであらう。